

メディカル+

+勉強室

視野が欠けてくる・狭くなる「緑内障」

40歳をすぎたら眼の定期検査を

緑内障は、日本人の失明原因の第1位の病気です。症状が出ても気がつかないことが多いのですが、早く見つけて治療を開始し、進行を抑えることが重要です。

眼科で定期的に検診を



海谷眼科
(浜松市)
院長
海谷 忠良先生

緑内障は自分では気づきにくい病気です。視野が欠けたり狭くなったりする症状を自覚した時には、すでに相当進行した段階といえます。視神経の半分が障害を受けると視野に変化が見られますが、それでも視力が低下せず、特に支障がないのも特徴です。緑内障には気づいておらず、他の要因で眼科を受診した際にたまたま視神経の異常が見つかるという場合がほとんどです。最近では健康診断で疑いを指摘され、詳しい検査を受けるために受診する方も増えています。また、現在は画像解析装置(OCT・光干渉断層計)を用いて緑内障特有の変化を詳しくチェックすることも可能です。

もし緑内障と分かっても必要以上に恐れることはありません。きちんと治療し、進行を抑制することが重要です。他の検診と同じように眼の検診を受け、眼鏡を作る時には必ず眼科医による検査を受けるなど、視神経の微妙な変化を見逃さないようにしましょう。

緑内障によって障害された視神経は、元に戻りません。40歳を過ぎたら、定期的な眼科を受診・検査を受けて、早期に緑内障を発見することが重要です。治療の中心は、眼圧を下げる目薬を用いる方法です。1種類の目薬から、2種類、3種類と併せて使うこともあります。またレーザー治療や、手術で目詰まりを起こしている眼の中の液体(房水)の流れを良くする方法もあります。

もし検査で見えていないところが発見されたとしても、悲観することはありません。日常生活に支障がないレベルの状態を治療で維持していくこともあります。またレーザー治療や、手術で目詰まりを起こしている眼の中の液体(房水)の流れを良くする方法もあります。

●片目で見てみよう



人は通常、両目で物を見ているので、緑内障の症状があっても気づかないことがあります。写真の例のように、片目を見た時に「上の部分がぼやけている」「右端の視野が欠けているのは、症状のひとつです。」

何より大切なのは、早期発見・早期治療

緑内障の代表的な症状は、見えない場所が現れたり(視野欠損)、見える範囲が狭くなったりする(視野狭窄)というものです。しかし、たとえ視野の一部が欠けていたとしても、両眼で見ていると、あまり不便を感じません。さらに進行すると、視野欠損に加えてかすみがかかったようになり、視神経の40〜50%が傷ついてくると、中心に近いところにも見えない部分が出てきます。例えば、文字の一部が欠けたり、テレビの画面の一部が見えなくなったりします。進行が進むと最終的に失明に至る危険性もあります。緑内障は、日本人の失明原因の第一位の疾患です。

40歳以上の日本人の失明原因の第一位

緑内障とは、眼球の中の人眼圧の上昇等が原因となり視神経が障害され、だんだんと視野が欠けたり、狭くなったりする病気です。40歳以上の日本人の20人に1人は緑内障といわれており、男女差はありません。その確率は年齢とともに高くなり、70歳以上では10人に1人以上の有病率と急に眼圧が上がって、眼痛や頭痛、吐き気、嘔吐などに見舞われる「閉塞隅角緑内障」は見つかりやすいのですが、日本人の場合、眼圧は正常の範囲内にも関わらず、何年もかけてゆっくり進行していく「正常眼圧緑内障」が多いのが特徴です。

視神経が傷ついて視野が欠けてくる・狭くなる

●緑内障とは

